

# 太陽の季節

映画文学人生論

原作：石原慎太郎 (1955) 「文学界」

監督：古川卓巳 (1956)

出演：津川達哉 長門裕之  
武田英子 南田洋子  
津川道久 三島耕  
伊豆 石原裕次郎

脚本：古川卓巳

撮影：伊佐山三郎

音楽：佐藤勝

参考：「法華教を生きる」  
「路上の仏」

貴方達には何もわかりやしないんだ

『太陽の季節』をはじめて読んだのは高校生のとき。私だけではない。田舎の高校でこの小説を読んだ同級生は何人もいた。芥川賞受賞作で高校生にこれほど読まれた小説はないと思う。

もちろん動機は単なる好奇心であり、文学作品として読んだわけではなかった。ヨットに乗るところか。海を見たことさえもない田舎の高校生に太陽族のマネができるはずがない。

しかも、颯爽と登場した石原慎太郎と弟の裕次郎がカッコよい若者だということにはわかるが、所詮、自分とは肌があわないと思つて、その後、彼の作品は敬遠し、太陽族映画も敬遠している。

ところが、今年、東日本大震災後に行われた東京都知事選で石原慎太郎は都民の圧倒的サポートを得て、四選をはたした。モラルに反抗して享樂的な生き方をする太陽族の若者が今や七十八歳の後期高齢者となつて、都知事に選ばれたという事実は「政治と文学」の問題として考えさせられる。

そもそも文学の本来の意味は経世の学問だ。昭和二十年代から三十年代には文学は政治の実践と両立させるべきだと主張する議論が盛んだった。とすれば、作家が政治家になつても不思議ではない。政治的立場に共鳴するかどうかは別として、文学と政治の実践を両立させている作家として石原慎太郎を見直す必要があるのではないか。そう思つて、映画を鑑賞し、原作を再読した。



# 太陽の季節

映画文学人生論

主人公の竜哉が英子に強く惹かれたのはボクシングに惹かれる気持と同じようなものだった。英子は妊娠し、生みたいと思っただが、竜哉の意志にしたがって、胎児が四ヶ月を過ぎたところで、掻爬手術をする。手術は失敗し、英子は死んだ。竜哉は葬式で英子の写真に香炉を叩きつけて、「馬鹿野郎！」と怒鳴り、「貴方達には何もわかりやしないんだ」と遺族に向かって叫んだ。

読者の私も「何もわかりやあしないんだ」と言われたような気分になる。たしかにわからない。こんな小説の作者がなぜ都知事になれるのか。

そこで、『法華教を生きる』と『路上の仏』を読んでみた。ベトナム戦争に従軍して急性肝炎で入院したとき、流行作家として金のためでしかない娯楽小説を書き続けるだけの人生でよいのかと自問し、参議院選挙への立候補を決意した。それで文学と政治がつながる道がひらけたという。

また、第二京浜でタクシーと抜きつ抜かれたのがうまいねえ」とタクシーの運転手が言って、どこかへ走り去った。それがきっかけで安全運転に切り替えた。これが路上の仏との出会い。

人間は変わるものだ。太陽族小説もスピード運転も若気の至りと納得したが「あんたには何もわかりやあしないんだ」と言われるかもしれない。

あの件は若気の至り障子張る